主体的に考えることができる子どもを育てる社会科学習

１　研究のねらい

２　研究を進めるにあたって

３　実践の概要

４　実践の様子

５　成果と課題

６　研究のまとめ

第３分科会
社会科教育
Ａ　歴史認識

湊　悠希（名古屋・大須小）

研究の概要報告

１　県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

７２次をむかえた教育研究愛知集会では、各参加地区より１９本のリポートが提出され、質疑応答や討議が活発に行われた。リポートでは、言語活動の工夫や地域素材を教材化することで社会に対する見方・考え方を育てる実践や、仲間とかかわりながらよりよい社会づくりへの参画をめざした実践などが報告された。

地理学習では、地域素材を教材化したり、ゲストティーチャーや他地域に住む人と通信アプリを使って情報を直接得たりすることで学ぶ意欲を高め、社会参画の意識や多面的・多角的な考え方をのばす実践が報告された。歴史学習では、ＩＣＴ機器を活用したり、思考ツールを活用しながら話し合いを深めたり、考えを視覚的に表現するワークシートを工夫したりすることで、歴史的事象を的確にとらえ、自他の考えを比較したり練り直し、各時代の特色を明らかにする実践が報告された。公民学習では、模擬裁判やさまざまな判例、裁判員制度の是非などの討論活動を通して社会への参画意識を高める実践が報告された。また、コロナ禍における営業規制と飲食店側の社会権や自由権などさまざまな権利の対立を通して、社会の諸問題を自分事としてとらえ、よりよい社会づくりへの参画をめざす実践が報告された。

どの分野においてもＩＣＴ機器やゲストティーチャーを効果的に活用したり、さまざまな思考ツールを活用したりすることで、社会への参画意識や多面的・多角的に考える力をのばす実践が報告された。

２　今次教育研究集会で論じられた主な課題

昨年までの成果と課題をもとに、子どもたちの学ぶ意欲を高める学習活動や教材開発について議論が行われた。参加者からは、ＩＣＴ機器や思考ツールを有効しながら可視化したり、地域の課題を教材として取り上げ、切実感をもたせたりすることの大切さが話し合われた。さらに、地域教材の価値や教材化のポイントは何かという議論については、自分たちの地域だけでなく他地域と比較することや、資料の精選や量、質の大切さ、ゲストティーチャーの有効活用などがあげられた。また、先人の働きを理解し、子どもが切実感を高めるための教材開発については、ロールプレイングを行って先人の願いや思いをもたせたり、過去から学んだことを現在に置き換えたりするなど、さまざまな意見が出された。さらに、社会参画の意欲を高めるための学習活動のあり方についての議論では、社会参画の行動を求めず、価値判断をもたせながら社会参画への意欲を高めるべきとの意見には、多くの参加者が賛同した。

これからも学ぶ過程において、子どもたち一人ひとりの「学びたい」「わかりたい」という学習に対する追究意欲を大切しながら、主体的に活動しようとする姿勢を育むことに期待をする。

（土屋武志・牛島康太郎）

報告書のできるまで

１　研究の具体的な経過

第 71 次までの教研活動の実績をふまえ、各単組社会科研究会を中心に、継続的・実践的研究が行われ、各単組で研究内容が発表・検討された。そして、それぞれの単組の研究報告が 10 月 15 日、愛知県産業労働センターで開催された県集会に集結し、報告・検討された。

２　研究組織とその参加者

第 72 次教育研究愛知県集会　社会科分科会　役員等

助言者	真島　聖子（愛知教育大学）	垣谷　英秋（豊田・高岡中）
	土屋　武志（愛知教育大学）	牛島康太郎（名古屋・宮中）
司会者	古居　成幸（西尾・八ツ面小）	中西　　悠（岡崎・豊富小）
	酒井　孝康（岡崎・城南小）	荻野　達成（豊橋・石巻中）

教育課程研究委員

部長	後藤　俊輔（名古屋・金城小）	
副部長	池部　弘樹（碧南・東中）	西脇　　佑（名古屋・神丘中）
委員	早瀬　友浩（尾張旭・西中）	伊藤　宏将（海部・弥富北中）
	甲斐　俊晃（名古屋・中小田井小）	松田　拓也（豊橋・東陽中）
	野口　哲平（名古屋・志段味中）	

１　研究のねらい

わたくしは、子どもたちに、楽しく授業にとりくみ、自ら問いをもって、主体的に追究する姿勢を身につけてほしい。そのために、学習に対して自分の考えをもち、交流しながら深めることのできる授業を行っていきたい。

しかし、本学級の多くの子どもたちは、社会科の学習に対して「覚えることが多い」「昔のことは今とあまり関係ない」という消極的な考えをもっている。それは、これまでの社会科の学習が知識を覚えることが中心であったり、実生活とのかかわりを感じることができなかったりしたためではないかと考える。

そこで、当時の苦労や工夫を実感したり、一つの事象についてさまざまな立場で考えたりする活動に重点をおくことで、自ら問いをもち、自分事としてとらえることができるようになると考えた。そうすることで、主体的に考えることのできる子どもに育つと考え、実践を行った。

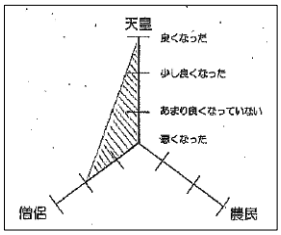
２　研究を進めるにあたって

手だて①　自ら問いをもつための疑似体験活動

実際の大きさや重さがわかる具体物などを使った疑似体験活動を行う。そうすることで、先人のとりくみや時代背景、苦労や工夫を実感し、自ら問いをもって主体的に追究することができるようになると考える。

手だて②　自分事としてとらえる話合い活動

さまざまな立場に立った話合い活動を行う。ここでは、思考ツールの一つであるレーダーチャートを活用して、考えを整理する。そうすることで、時代背景や当時の人々の思いをくみ取り、自分がこの時代に生きていたらどのように乗り越えるかなど、自分事として考えることができ、自分の考えを深めることができると考える。



【レーダーチャート】

３　実践の概要

(1) 実践単元　「天皇中心の国づくり」（９時間完了）

(2) 実践の対象　６年生　39 名

(3) 実践のねらい

この頃の世の中の様子を人物の働きや代表的な文化遺産について考え、表現することを通して、天皇を中心とした政治が確立されたことを理解できるようにする。

(4) 学習過程

過程	時数	主な学習活動	予想される子どもの反応
つかむ	1	○　地図帳を使い、愛知県から藤原京までどのくらいの道のりかをとらえる。手だて１ ○　豪族の争いで不安定な世の中であったために、天皇中心の国づくりをめざしたことをとらえる。	・　歩きで行ったのはたいへんだな。 ・　何時間くらいかかるのかな。 ・　争いが絶えない日々は不安になる。 ・　今の世界もコロナで不安だね。 ・　こんな不安定な世の中を、自力で解決するのは難しい。

		学習問題 **天皇を中心とした政治を確立させるために、だれがどのようなはたらきをしたのだろう。**	
	2	○　学習問題についての予想を立てる。	・　蘇我氏は生きているから、蘇我氏が受け継ぐのかな。 ・　遣隋使を送っているから、違う文化も取り入れているよ。 ・　聖徳太子一人ではできてない目標があるから、これからたくさんの人が出てくると思う。
調べる	3	○　大化の改新について調べる。	・　天皇ではない蘇我氏の勢力が拡大したら、聖徳太子の願いはかなわない。 ・　中臣鎌足と中大兄皇子は聖徳太子の意思を受け継いでいるね。
		○　大化の改新後について調べる。	・　制度がたくさんできたね。 ・　豪族の支配がしにくい世の中になっている。 ・　豪族の問題は済んでも、人々の暮らしはあまり豊かではないのかもしれない。
		○　木簡を実際に見る。手だて１	・　これを持ちながら歩いて都までいくのは負担だ。 ・　どうして木に文字が書かれているのだろう。
	4	○　平城京と地方のくらしを見比べ、当時の人々のくらしの様子を調べる。	・　藤原京とつくり方が似ているね。 ・　朱雀大路はすごく広くてにぎわっている。 ・　馬に乗る人や武器を持つ人がいるよ。 ・　とても平和な感じがするね。 ・　地方の人々の暮らしは豊かではなさそう。 ・　伝染病、災害、反乱で世の中が不安定だ。 ・　自分たちの力では安定させることはできなさそう。
		○　聖武天皇のころのできごとを調べる。	・　５年間に４回も都を移している。 ・　仏教の力で不安をしずめようとしたから、大仏も造ったのだね。
	5	○　大仏造りで使う金属を各地方から集める。手だて１	・　花壇から教室まで運ぶのはすごくたいへん。

	6 7 8	○　大仏の造り方を調べ、班ごとにパーツをつくる。手だて１ ○　大仏開眼をして大仏を完成する。手だて１ ○　奈良時代に大陸から学んだものをまとめる。	・　こんなに重たいものを何日もかけて運ぶのはつらいから、逃げ出したくなる。 ・　全国から金属を集めたり、260 万人もの人々が協力したりして大仏を造ったのだね。 ・　大仏が大きいことは知っていたけど、この大きさを造るのはすごい。 ・　平面でも造るのがたいへんだったのに、この時代に立体で造っていたのはすごい。 ・　こんなにがんばって造っても、関係者しか完成する瞬間を見ることができなかったのは残念だ。 ・　鑑真は苦労しても仏教を伝えたかったんだね。 ・　遣唐使を通じて都のつくり方を学んだのかな。
深める	9	○　大仏は完成したが、世の中はよくなったのかを考える。手だて２ テーマ：大仏が造られて、世の中はよくなったのだろうか。 ○　学習してきたことをもとに、予想を立てる。 ○　同じ考えの子どもどうしでグループになり、話し合う。 ○　クラス全体で意見を交流する。	・　位の高い人たちは開眼の儀を見ることができたのに、がんばって大仏造りに参加した人々が見ることができなかったのは変だな。 ・　協力した人々がいなければ大仏は完成しなかった。 ・　多くのお金や資源を使って大仏を造ったのに、苦しんでいる人は大勢いた。 ・　聖武天皇はやりたいことができたから、世の中はよくなったと思う。 ・　聖武天皇の考えに共感した上で大仏造りに参加しているのだから、思いが一つになって世の中はよくなった。 ・　政治や社会のしくみをつくることは、とてもたいへんだ。

４　実践の様子

【第１時】手だて１

全国各地から藤原京に運んだ特産品が載っている地図を提示して、「愛知県からだと、歩いて

どのくらいかかると思う？」と尋ねた。すると、子どもは「距離がありそうだから１０時間くらいかな」と答えた。そこで、学校から藤原京までどのくらいの道のりか確かめる活動を行った。地図帳を使いながら道をたどると、「１０時間じゃ無理かもしれない。山や川があってたいへん」と気付くことができた。「なぜ当時はこんなことをしていたのか知りたい」という声が多くあがった。

その後、１日と６時間かかることを伝えると、子どもたちは、「ここまでしてやらなければならないことがあったのか？」「自分だったら絶対断っていたと思うけど、断れなかったのかな？」と、自分事としてとらえ、自ら問いをもつ姿が見られた。

【第２・３時】 手だて１

教科書の隅に木簡の写真が載っている。実際の大きさで見た時に、木簡と荷物を運ぶ負担とたいへんさがとらえられると思い、実物と同じ大きさの木簡をつくった。木簡を見せると、「なぜ木だったのか」という疑問をもつ子や、「紙だと軽いのにね」と言う子がいた。木は削って何度も使うことができることを伝えると、「一見世の中はよくなったように見えたけど、紙ではなく木を使わないといけないくらい貧しかったのかな」「たくさんの荷物があって見にくいから木が便利だったのかも」と、時代背景をふまえて発言していた。不安定だった世の中を、聖徳太子が立て直し、その意思を中大兄皇子と中臣鎌足が受け継いだが、その後どうなっていくのか、期待を膨らませていた。

【第４時】

資料から、平城京は、朱雀大路はとても広くてにぎわっている様子で、家の屋根が板でできていて立派であることをとらえた子どもたちは、奈良時代に対してとても平和な印象をもっていた。しかし、別の資料で、地方の人々の暮らしは縄文時代と変わらない竪穴住居であったり、重い税に苦しんでいたりしたことや、伝染病や災害、反乱で世の中が不安定であったことに気付くと、子どもは「とても自分たちの力では安定させることはできなさそう」と感想をもっていた。そこで、聖武天皇の事績について概観した子どもたちは、「都をそんなに移動したら、もっとたいへんだと思う…」「え、仏教よりもお金が必要でしょ！」とつぎつぎに言い、当時を、不安定で貧しい世の中ととらえていたようであった。天皇が世の中をよりよくしようとしても、地方の人々には伝わっていないという自分の考えをもち、積極的に発言していた。

【第５時】 手だて１

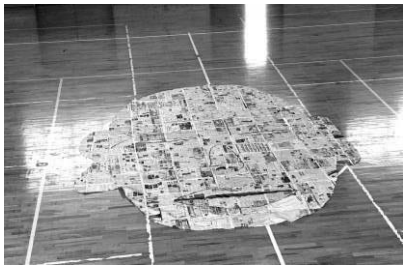
ビー玉送りを通して、大仏造りで使う金属を各地方から運ぶ疑似体験活動をした。ビー玉送りでは、銅、すず、水銀、金などの運ぶものごとに運ぶ距離を変え、量が多い金属ほどビー玉の数を増やして行った。例えば、金は宮城県から運ばれている。教室を平城京として、金カードを引いた班は、教室から一番遠い運動場の端からビー玉送りを始めることになる。簡単には運ぶことができないように、ビー玉は下敷きを使って運んだ。何度も失敗しながら平城京に見たてた教室に運び終えると、「やっと着いた！果てしない道のり～！」「実際やった人、たいへんだよね」と感想が聞こえた。中には、「税も納めて、生活も切り詰めながら大仏の材料も運ぶなんて、どれだけ大仏がすばらしいものでも辛くなると思うな」など、自分の体験に結びつけて考える様子も見られた。

【大仏造りで使う金属に見たてたビー玉を運ぶ様子】

【第６・７時】手だて１

新聞紙を用いた大仏造りの疑似体験活動にもとりくんだ。個々で大仏の顔パーツの大きさをタブレットで調べ、最後にみんなで協力して大仏の顔を完成させた。子どもたちは、「お金が大切だと思っていたけれど、この大仏を見たらなんとかなるかもと思える」「本物を修学旅行で見てみたい！」「紙で大仏を造るだけでもたいへんなのに、銅で造る大仏はどれだけたいへんだったんだろう」「税もあって農民の生活は苦しかったと思うけど、実際はどうだったのかな」と、疑似体験活動を通して、自ら問いをもち、意欲を高める姿が見られた。

【パーツづくりの様子】



【大仏の顔が完成した様子】

【大仏開眼の儀の様子】

大仏開眼の儀では、全員で完成を祝ったが、当時は関係者しか完成する瞬間を見ることができず、一番貢献したであろう農民は参加していないことを知り、驚いていた。「なぜ造った農民はこの紐を持たせてもらえなかったの？」と疑似体験活動を通して疑問に思ったことを、意欲をもって調べる姿が見られた。

【第８時】

「胡瓜」「胡麻」の読み仮名クイズをした後、これらがシルクロードを通って日本に伝わったと考えられていることを話すと、子どもたちは、「意外と身近なんだね！」とシルクロードの広がりを感じ取っていた。また、遣唐使や鑑真について調べると、「命をかけてでも学びたい、伝えたいというのがかっこいい」「鑑真ががんばったから、今の仏教があるんだね」「行基もすごいけど、鑑真もすごい」「大仏と無関係ではなく、仏教関係でつながっていたんだね」と、当時の人々の大陸文化への思いに共感していた。

【第９時】手だて２

A　天皇：「少しよくなった」

選んだ理由は…仏教を広めて、仏教の影響を受けた文化が栄えたから。

B　僧侶：「少しよくなった」

選んだ理由は…仏教が大きく広まったけど、災害や病気はおさまっていない。

C　農民：「悪くなった」

選んだ理由は…ただでさえ苦しい生活なのに、もっと働かないといけなくなった…

【立場別ワークシートの記述】

「大仏ができたことによって、世の中はよくなったのか」というテーマで、話合い活動を行った。まず、天皇、僧侶、農民の中から一つの立場を選択し、テーマについて考えた。テーマ

について考える際には、世の中が「よくなった」「少しよくなった」「あまりよくなっていない」「悪くなった」の四択で判断し、その理由を記述した。次に、三つの立場が一人ずついるグループをつくり、レーダーチャートを使いながら考えを伝え合った上で、テーマについて話合った。そして話合いを振り返った上で最終的な自分の判断を三つの立場を総合させて考えた。天皇、僧侶の立場では大仏が完成したことによって仏教が広まり、世の中はよくなったと考える子どもが多かった。しかし、農民は重い税や暮らしぶりに変化はないため、世の中はよくなったといえないという考えもみられた。その中で「自分が農民だったら大仏を造るよりもお金が欲しい。その方が暮らしは豊かになり、世の中もよくなったと思う」と自分事としてとらえることができた子どももいた。

【思考ツールを使って話し合う様子】

まとめの場面では、多くの子どもたちが「世の中がよくなったとは言えないが、仏教の力を借りて、みんなで世の中をよくしていこうとしたことがわかった」と、三つの立場をふまえてまとめることができた。話合い活動を通して、自分の考えを深め、時代背景や当時の人々の思いをくみ取り、自分事として考えることができた。

５　成果と課題（○：成果　●：課題）

手だて①　自ら問いをもつための疑似体験活動

○　疑似体験活動をすることで、当時のとりくみや苦労を実感し、そこから多くの疑問をもち、「天皇が世の中をよりよくしようとしても、地方の人々には伝わっていない」など、自分の考えをもつことができた。

●　疑似体験活動の意味を理解できず、疑問をもつことができない子どもが一部に見られた。そのため、前時の子どもたちの疑問や思いと疑似体験活動のつながりを示しながら提示するとよいと考える。

手だて②　自分事としてとらえる話合い活動

○　自分の考えをもち、さまざまな立場をもとにした話し合いをし、それをまた思考ツールで整理する。そうすることで、「もしこの時代に自分が生きていたらどうするか」など自分事としてとらえることができた。

●　話合いが活発にならなかった班があった。話し合いのグループを異なる立場の人で構成したため、他の立場の人に意見を否定される可能性に不安を感じたのではないかと考える。そのため、話合い活動の前に、同じ立場のグループで考えを共有し、安心感をもってから話し合うとよいと考える。

６　研究のまとめ

子どもたちが主体的に考えて社会科を学習するために、当時の苦労や工夫を実感する疑似体験活動や、さまざまな立場で考えた話合い活動を通して、子どもたちは自ら問いをもち、自分事としてとらえることができるようになり、主体的に考えることのできる子どもの姿に近付いた。疑似体験活動や話合い活動を取り入れたことはたいへん有効であるとわかった。今後もさまざまな疑似体験活動や話合い活動を通して、主体的に考えることのできる子どもの姿が多く見られるよう努力していきたい。